

## 序

郭沫若は日本に亡命してから中国古代史の研究に没頭した。もっぱら文学と革命に従事していた彼が、この時に急に中国古代史の研究を開始することになったその時代背景については『郭沫若研究会報』第五号「郭沫若の古文字研究（一）」で述べた。彼は研究するに当たってまず、何が信頼できる資料であるか、について考えた。いま存在する、書物となっている文献は、編集や書写の段階で、その時代とそれに関わった人の思想が染み込んでいる。そしてその時代に、価値なしと判断されたものはしばしば排除される。

だから郭沫若が中国古代史を研究するに当たって同時代資料である甲骨文と青銅器銘文に着目したのは当然であった。彼は、何の予備知識も無かった甲骨文と金文を古代史研究の主要な資料であると判断しこの時に初めて勉強を始めた。しかも師はいなかった。それにもかかわらず短期間のうちに当時の最高水準に達し、たくさんの著作を出版した。ここにも彼の非凡な資質を見ることができる。彼は主に東洋文庫（東京）所蔵の資料を利用して研究した。

彼は、中国古代史を研究する上で甲骨文と金文は重要な資料であるということでこれらを研究したのである。目的とした著作は『中国古代社会研究』であり一九三〇年一月に上海聯合書店から出版された。この副産物として生まれ出たのが甲骨文と金文に関する研究である。

『甲骨文字研究・序』で彼はこう書いている。

私が卜辞を研究した目的は中国社会の起源を探究することだった。もとは決して文字や史地の学問にこだわるつもりではなかった。しかし文字を正しく読むことはあらゆる研究の第一歩である。ゆえにこの分野に深くかかわらないわけにはいかなかった。

また『殷周青銅器銘文研究』の「序」でも冒頭でこう書いている。

私が殷周時代の古文を研究したその目的は、本来は中国の古代社会を研究することだった。ところでその研究を続けていくうちに文字考釈の方面でもかなりの成果が挙げられた。そこでさきに「甲骨文釈」という一書を完成させた。これはもっぱら甲骨文字の考釈を集めたものである。

ここに見える「甲骨文釈」は『中国古代社会研究』の中でも出てくるが、すなわち『甲骨文字研究』である。

研究の主たる目的ではなかったといえ、本来この手のものはやはり好みに合っていた、と判断してよいだろう。同じ時期の疑古派の顧頡剛などはこういう分野の研究に進むことは無かった。

一連の古文字研究の専著の最初は『甲骨文字研究』（全二冊）と『殷周青銅器銘文研

究』（全二冊）である。『甲骨文字研究』は線装本二冊で上海の大東書局から一九三一年五月に出版された。ただしこの「序」の最後の行は“一九一九年八月一日輟筆”となっている。これは勿論「一九二九年」が正しい。『殷周青銅器銘文研究』もやはり線装本二冊で同じく大東書局から一九三一年六月に出版された。こちらの「序」の最後の行は“一九三〇年七月廿九日沫若”となっている。出版時期はほぼ同時だが、『甲骨文字研究』を書き上げて後、一年後にこれを書き上げたのである。

『甲骨文字研究』の中に「釈支干」という一篇がある。郭沫若はこの中で、十二支はバビロニア天文学の影響を受けて成立したと述べている。この時代、多くの優れた知識人はみな西欧や日本に行ってたくさん吸収しなければならないと考えていた。狭隘な国粋主義は見られなかった。現代の中国人研究者はたいてい、中国古代の文化はすべて今の中国の国境内に起源があつて、外国から入ってきたものはない、と主張している。二十世紀の前半は、すぐれた知識人の間に外来文化の影響を否定するかたくな姿勢は見られなかった。いま中国の古代史研究の学界で「疑古派」は肩身が狭い。こういう状況を考えて、郭沫若の「釈支干」を振り返ってみるのは現代的意義があると考えられる。いま「釈支干」の中から十二支起源に関する研究を紹介する。

ただ郭氏は古代天文学についての認識が不十分であるので、明らかな間違いが見られる。しかし広い視野をもって探求した姿勢を私は高く評価したい。

干支の起源は非常に古い。殷墟出土の甲骨文の中で最も頻りに現れる字は干支である。最も古い甲骨文はおよそ紀元前一四〇〇年のものなので、干支は少なくとも今から三千四百年前には出来ていたことになる。

十干十二支に対する古代の呼び名

干支の起源は非常に古いけれども、現在我々が使っている「干支」あるいは「十干」「十二支」という呼び方はそれほど古くない。甲骨文の中で十干と十二支は頻りに現れるけれども、当時これらを何と呼んでいたか、甲骨文の中にその名称は見えない。漢代より古い文献にも干支はもちろんよく出てくるが、その呼び名は一定していない。最も古い呼び名は、春秋時代末期から戦国時代初期（前五世紀）にかけて成立したと考えられる『国語』と『春秋左伝』に見える。『国語』では、十干十二支を「十日十二辰」と呼んでいる。『春秋左伝』では十干を「日之数、十」と呼んでいる。これが漢代の『史記』の中では「十母十二子」と呼ばれている。

郭沫若が「釈支干」の冒頭で述べたように、「干・支」という字が使われたのは後漢時代になってからである。例えば、『白虎通』という書物では“甲乙は幹なり、子丑は枝なり”と記されている。このように後漢時代にはまず樹木の幹と枝にたとえられた。ところが同時代・王充の『論衡』の中で初めて「干」と「支」が出てくる。恐らく「幹」と「枝」が簡略化されて、あるいは抽象化されて「干」「支」が使われるようになったのだろう。そして二千年後の現在まで続いている。つまり十二支の最も古い呼び名は「十二辰」であり、郭沫若もこれを使用している。

郭沫若は、十二辰の起源はバビロニア天文学にあると考えた。よってまずバビロニア天文学について知らなくてはならない。その際に彼が主に利用した文献はエレミアス Alfred Jeremias の『古代オリエントの精神文化』Handbuch der Altorientalischen Geisteskultur (HAOG) である。この本はその書名からは推測できなくらい、オリエントの天文学が主要部分を占めている。また天文に関連する画像などをたくさん挿図として掲載している点でも有用な文献である。エレミアスはメソポタミア出土遺物の中から、天文に関連する画像を実に丹念に集めてこの書を完成させた。まだ公刊されていない粘土板なども駆使している。この分野でこれ以上の著作は今後出ることはないと思う。郭氏がこの書に着目したのは賢明であったと言うべきか、あるいは当然であったと言うべきか。

またバビロニア天文学に関する研究は一九〇〇年ころの数十年がもっとも盛んで、また出版された著作はほとんどドイツ語文献である。筆者(成家)はドイツ語を得意とはしないが、ここで郭氏が利用したドイツ語文献に基づいて、バビロニア天文学を紹介したい。

「甲骨文字研究序録」によれば、郭氏はHAOGの第二版を使用した。増訂版である第二版は一九二九年に Leipzig で出版された。だから彼は、これが出版されるとほとんど間を置かずに関読したことになる。

本稿は『郭沫若全集・考古編』第一巻所収の「甲骨文字研究」を使用する。二四八頁以下。

## 十二獣帯の成立事情と成立時期

ギリシアの十二宮はバビロニアに起源がある。(図一参照)バビロニアの黄道十二星座のもとになる星座は、はるか昔、紀元前の六二〇〇年から四四〇〇年の間にすでに出現していたと思われる。しかし文献によって確認できるものは紀元前の四四〇〇年から二二〇〇年の間にある。およそ紀元前一〇〇〇年の記録(粘土板文書 C.T. XXX III 1-8)には黄道上にある十七の星座が列挙されている。

以下、エレミアス「古代オリエント」の獣帯星図に関する記述である。こういう知識を前提として郭沫若は十二支起源について考察した。よって簡単に紹介する。

空想の星座図の環、いわゆる獣帯星座、これはいつ頃の発想で考え出されたものなのか? それらは、月の(あるいは太陽、木星などなどの) Wegstationen(Häuser) “家” “宮”、“宿”として注視されたものであるが。そしてまたこれはいつの時代に、これらの星座の長さがそれぞれ異なっていることに何の配慮もなく(無視して)、これら十二の星座絵の列に基づいて、十二獣の帯がそれぞれ均等に30度に区分されたのか?

ずっと昔、天上は、古代の霊感世界、超感覚の世界(観念的世界)の中で、さしあたりは絵本(絵の世界)であったのではなく、算数書であった。

とにかく、月と太陽の「通り道」に当たる獣帯星座は、部分的にはエジプトのヒエ

ログリフ(非常に古い)を思い起こさせるという点はだれでも認める。獣帯のバビロニア起源については誰にも異論はない。ただ次の問題だけが未解決のままにある。

古代においてそれはどういう配置であったのか、および、どのようにして発達していわゆる獣帯(よく知られている十二の星座図)になったのか。

恒星群における区分について見ると、そぼくな表象(星座の図)が独立している。つまり天上における通り道、そこを、動く天体が運行するが、は天上世界 himmlische Erde であり、天上の海洋に堤の高台(長く連なる高台)があり、海洋はそれによって境界を作られるが、またその上に、偉大な神々の家であるところの「住まい」がある。

我々はHAOG 139頁で、この海洋の堤に対するシュメール語の名称として UL.HE と GIR があり、それはアッカド語の Supuk same つまり天上世界の「長く続く堤」であることを見た。

古代の獣帯に対する未解決の疑問のために、エレミアスは純粋に天文学的な検討を提唱したいと考えた。これが考案された時代は、天文学的・暦学的に必ず説明できる時代に落ち着く。この時代には、三つの、水に関連が強いと思われる動物-ヤギ・Wassermann 水を運ぶ人・魚-は実際にも湿気のある一季つまり雨季に属し、オリエントにおいては我々の冬季と合致し、正しい。獣帯が宇宙的に固定していると思われていた時代には、もっとも下の星座は「水を運ぶ人」で、その右はやぎ-半やぎ半魚、そして左は魚である。(HAOG 図 120a) これによって我々は天文学的時代を知ることができる。そこに、太陽の春分地点の星座として牡牛がある。この天文学的時代は、紀元前の四千年から二千年の間に指定される。だからハムラビ王の時代であり、ついにその終わりの時期に至って、牡羊が春分星座となった。ゆえにそれ(牡牛)は、ハムラビ王時代の新年祭においても、帝国の神マルドゥクの啓示として宗教儀式上で尊敬された。雨季の月宿星座としての魚、水を運ぶ人、半やぎ半魚を持つ獣帯はだからハムラビ王以前においてすでに身近なものであったに違いない。ただし当時、他の空間がすでに九つの黄道星座で敷き詰められていたかどうかについてはもちろん証明されない。紀元前千三百年に属するポアズキョイ(トルコの遺跡)出土の「星表」では、ライオンが欠けている。それは春分点星座としての牡牛とともに、太陽転換の場所に当たる「暦月と結びつく星」(夏至の星)として期待されてあったはずである。

それはまた天秤も欠いている。そこではこの Totenwage 「死の天秤」があり、この設定は最初はその天文学的古代の時代に起こったものだろう。そこでは牡羊だけが春分星座であった。だから最初ハムラビ王時代からのものである(HAOG 図 120c)。

エレミアスは、こう考える。図 120a を見て分かるように、乙女 Jungfrau-天上の女王という設定(対応)はなおずっと古い時代を必要とした。オトメ Virgo、それは女性祖先として、天上の女王となることを要求するが、その天は、エタナ伝説の中で、なおアヌ玉座の上方にある。乙女は、暦月の星として、環状経路の最高地点にあり、一般的に、夏季における太陽転換(夏至)の月(暦の月)と見られていた。それは紀

元前四千年紀、最初のシュメル文化絶頂期のものと見てのみ正しい。そこでは双子はひょっとしたら春分星座だった可能性がある。

我々が獣環と呼ぶ星座の帯は、その形成の始まりにおいて、それは、月の通り道（白道）あるいは太陽の通り道（黄道）という概念である、

獣環考案の時代およびバビロニア天文学の時代に関する重要な疑問は、獣環帯上の月もしくは太陽の通り道の始発地点の対応の仕方（始発地点が何星座に当たるか）と連結している。

獣環帯の星に関する最も古い文献証拠は、我々がまもなく見るように、二千年よりいくらか前の時代に由来する。そしてその時代に、春分始発のカレンダーが最終的に太陽転換カレンダーに打ち勝った。この時代に、太陽の春分地点はなお牡牛にあった（紀元前2200年にはプレアデスに）。しかし歳差のせい、我々のオヒツジ座の分野に、徐々に移動しつつあった。太陽の春分地点の星座として牡羊が重要であった時代は、およそ紀元前二千年からという見方が天文学的に正しい。

しかし紀元前二千年の時でもなお、（慣習的に）オウシ座 $\alpha$ 星（ヒアデス・アルデバラン、畢）が、そして修正後には、オウシ座 $\eta$ 星（Alkyone、プレアデス、昴の星）が、年・始発の星として使われた。

インドでは、プレアデス（オウシ座 $\eta$ 星、すばる）をもって最初の月宿・Krittikaとした。中国では漢王朝の時代に、月の最初の宿としてアルデバラン（おうし座 $\alpha$ 星、畢宿）を当てた。アラブでは最初のものとして、der menâzil-al-kamar（プレアデス。バビロニアの menazil, manzil, つまり「所在地」の意味）を当てた。

プレアデス（オウシ座）はこの権威のために、年運行の始発点として kakkab-Zappu と呼ばれた。つまり「絶対基準の星」という意味である。それは、ちょうど一つの明確な時期とだけ合致する。すなわち牡牛時代である。

十二星座は、春分点が牡牛にあった時期に成立したと考えられる。その最も古い証拠が、Serie  $\mu$ Apin の中で提示されているところの、バビロニア天文学における獣環帯の星の列挙である。それは紀元前三千年紀の最後の世紀に由来し、後の時代にはその写しのみが伝えられた。ヴァイトナーが、それ（Serie  $\mu$ Apin）をバビロニア天文学の集大成として説明したのは正しい。テキストの写しにおいて「白道あるいは黄道上にある星座」が列挙されている。プレアデスが「始まり」（年・始発）を作る。それは、紀元前2200年には、太陽が春分時に居る場所であった。その星座列は以下のごとくである。

- 1.mul Zappu プレアデス
- 2.mul GÛ.AN.NA 雄牛のヒアデス
- 3.mul Šitaddalu オリオン
- 4.mul ŠU.GI ペルセウス
- 5.mul Tuâmê rabûti 巨大な双子
- 6.mul Gamlu 御者

- 7.mul AL.LUL 蟹
- 8.mul UR.GU.LA ライオン
- 9.mul AB.ŠIN (EŠ.ŠIN) 乙女（穂）
- 10.mul Zi-ba-ni-tum 天秤
- 11.mul Akrabu 蝸
- 12.mul PA.BIL.SAG 射手
- 13.mul Suhurmâšu, Steinbock(Capricorn.The Goat.)Ziegenfisch ヤギ魚
- 14.mul GU.LA Wassermann 水を運ぶ男、Riese 巨人
- 15.und 16.Zibbâti mul ŠIM.MAH mul A-nu-ni-tum 獣環上の「南の魚」と「北の魚」の尾
- 17.mul amêl Agru 牡羊

郭沫若はこれを中国語訳で紹介した。「釈支干」248, 249頁

- 一. 昴。現代、プレアデスと呼ばれる星団である。オウシ座にある。
- 二. 畢。現代、ヒアデスと呼ばれる星団である。オウシ座にある。
- 三. 參。現代のオリオン座にある。
- 四. 天船（二十八宿以外の星宿）。ペルセウス座にある。
- 五. 大ふたご座。二十八宿の東井。フタゴ座にある。
- 六. 天五潢（二十八宿以外の星宿）。ギョシヤ座にある。
- 七. 輿鬼。カニ座にある。
- 八. 軒轅（二十八宿以外の星宿）。シシ座にある。
- 九. 角。オトメ座にある。バビロニア語の原義は「禾」あるいは「穂」である。
- 十. 氐、亢。テンビン座。（亢はオトメ座にある。）
- 十一. 房、心、尾。サソリ座にある。
- 十二. 箕、斗。イテ（射手）座にある。
- 十三. 牛。ヤギ座にある。ただし、ドイツ語表記は Ziegenfisch で、「半ヤギ半魚」と訳してよいだろう。上半身はヤギで、下半身は魚という架空の動物である。オリエン出土の図像がエレミアス「古代オリエント」に掲載されている（図123、124）。
- 十四. 女、虚。ミズガメ座にある。ドイツ語では Wassermann の他、Riese と表記している。巨人あるいは巨星の意味であろうか。この図はおそらく「水を運ぶ人」で、後に「水瓶座」の星座図に変化する。欧州中世以降の星座図は、現在出版されている星座関係の図書の中でよく紹介される。また千葉市立郷土博物館は中世近世の星図をたくさん所蔵している。同館は図録を出版して紹介しているので、これを見るとギリシャ起源の星座図がよく分かる。これらをオリエント出土の画像と対照させると、その淵源がここにあることがよく理解できる。
- 十五. と十六. 獣環の中の南の魚と北の魚の尾。（南魚の尾は奎で、北魚は營室、東壁

の下にある。双魚・ウオ座の全長は室、壁、奎これら三宿にほぼ等しい。) 奎はウオ座とアンドロメダ座にまたがっている。壁と室はペガサス座にある。

十七. 婁、胃。オヒツジ座にある。

これらは昴畢(オウシ座)から始まっている。エレミアスは、春分点がここにあった時期に成立した星座群であると考えた。春分点がオウシ座にあった時期は前4400年2200年の間であった。また彼は「十七」という数は天文の中で出てくる数ではないので、上記星座群は、黄道十二星座の中に他の星座が割り込んだと解釈した。つまり、ギョシャ座はもとフタゴに属し、ペルセウスはオウシに属していた。

紀元前十三世紀にさかのぼる文字資料の証拠がある。それは、ボアズキョイで発見されたバビロニアの「星表」である。それは呪文を扱っているが、天上の階級制度において **Helft mir** 我を救え、と大声で言われた。このテキストは同時に、古い占星術の **gnostischen Sinn** 霊感的感覚を示している。そこではまだ、占星術的計算を扱っているのではなくて、「祝福の作用」あるいは対極的な「呪いの作用」に関する感覚をもって、世界の神の精神本質として星辰を扱っている。

まず最初に、四惑星が列挙される。そして、獣環帯の階級制度が続く。

1. 耕地の一区画すなわち「くじら座+おひつじ座」
2. おうし座のプレアデス(すばる)
3. ヒアデスのアルデバラン(おうし座 $\alpha$ 星、畢)、おうしの類
4. ふたご座の地域内のオリオン
5. 待ち受けるかに座の位置にあるシリウス
6. スピカつまり乙女(穂)がそれを代表する
7. **GIR.TAB** すなわち、さそり座
8. アルタイル、わし座の一番明るい星、ここではさそり座を代行する
9. 南の魚、みずがめ座の領域
10. 我々の獣環にある、南のうお

上記十の星座群について、郭沫若は次のように紹介している。

- 一. 漢語では「田圃」、婁胃の南にある屠積に相当する。
- 二. 漢語では「星辰」、昴に相当する。
- 三. 漢語では「牛背」、畢に相当する。(HAOG、s.208の **Backe des Stiers** を、郭沫若は「牛背」と訳した。これは誤解で「牛の類」が正しい。)
- 四. 参宿、フタゴ座に替えて。
- 五. 大犬(中国の天狼)。蟹座の輿鬼宿に替えて使っている。(大犬は、バビロンでは「矢」であり、それに隣接する数星は中国では弧と呼ばれ、バビロンでもまた「弧」**KAK.BAN** である。

六. これもまた「弧」星であり、角宿に相当する。

七. サソリ座であり、すなわち中国の房、心、尾である。

八. アルタイル、ワシ座の最も明るい星である。中国の河鼓である。磨羯(山羊または山羊魚尾)に替えて使っている。

九. 南魚。虚宿の下にあり、中国の北落師門である。水瓶に替えて使っている。

十. 双魚座の南魚。中国の奎宿である。

この後、郭沫若は次のように述べている。

ここにはわずかに十星が挙げられているだけである。畢と昴は合して当然牡牛になる。十二宮中の獅子、天秤、射手を欠いている。天秤と射手を欠く理由についてヴァイトナーは、これら二星はもとは蝸座の中に含まれていた、と考えた。しかし獅子を欠く理由は分からない。エレミアスは、星名が牡羊座から始まるのは、その時、春分点がこの星座の中にあつたからに違いないと考えた。春分点が牡牛座から牡羊座に移っていく時期は、およそ紀元前二千二百年代であった。そのまま続いて、西暦百年代になって、初めて双魚に移っていった。そして現在も双魚にある。ギリシア十二宮は白羊宮から始まるが、これはギリシア-バビロニア間の交流が紀元前八百年代に始まったからで、春分点がまさに牡羊にあつた時で、この時、十二宮が初めてバビロニアからギリシアに入ったのであつた。

最も古い文献(文字記録)は上に挙げた二種だけであるが、これ以外にボアズキョイ星表よりやや古いクドゥル(石製の界標。この表面に太陽月星座図の浮き彫りが施されてある。)コセール時代の遺物である。そこに「人首蝸身鳥足」の像が描かれている。(HAOG、205頁)蝸座と射手座の合体である。また「羊首魚身」の磨羯、水瓶(水を運ぶ人)154頁、織女(女神 **Gula** と犬)の像もある。

これ以外にも、時代はかなり下るが、遺物と古文書も、十二宮の起原はバビロンにあることを証明している。これはすでに学術界の定説になっている。

(郭沫若「釈支干」250-252頁)

エレミアスはこう考えた。

我々は上記星座記録によって次のことが分かる。精神存在に関する統治領域として、獣環の十の区域が列挙されている。最初に牡羊の区域がある。そして、それは鯨と結びつけられている。それは、春分時、黄道上における太陽の、当時の天文学的な実際の位置と合致する。紀元前2000年頃から、牡牛の区域から牡羊に移った。そして、後ろ向き(春分点が移動する向きと反対の向き)に進む順序で続く。牡牛の二つの区域つまりプレアデスと「牡牛の類」。そして、双子の区域から、蟹、乙女、蝸、山羊、水瓶、魚へと進む。だから蟹と乙女の間にある獅子、乙女と蝸の間にある天秤を欠いている。もっと古いものは、コセール時代のいわゆる界石上に、獣環の個々の星座を表す図としてある。コセール時代の界石上に見える描写(S.139)は、まったく、その意味(星座を表す図)として設置されたはずである。

確かにここに、以下のような画像的資料を認めることができる。すなわち射手と共にある蝸は獣環星座として一緒になって、よく現れる、Abb.121。「やぎ魚」として描かれている山羊、「水を運ぶ人」(みずがめ) Abb.91、琴とヘルクレス(犬を連れてくる女神グラ Gula)。

ワルカ・エレクで出土した、アルザシデン時代 *Arsacidenezeit* のテキスト群は(それゆえ非常に遅い時期の伝承である)星座図と一緒に描かれてあるもののせいでとりわけ興味深い。

HAOG において公刊されたテキストの斜字体文書によって、以下のことが分かる。「牡牛において始まる」という句 MUL.MUL=Zappu が、私を惑わし、誤解させた。すなわち、ここで、獣環星座の順番は牡牛と共に始まった(それゆえに、古風である)ことが示されている。もう一つのテキストは次のことを示している。すなわち、それは主要星についての示唆にかかわる内容であり、描かれた星座はそれに対して適用される(あてはまる)。しし座に関するテキストは獅子ライオンの図と共に始まり、おとめ座に関するテキストは乙女の図と共に始まる。

しかしここで、一つの問題が起きる。つまり、獣環の十二星座がまだ必要とされていなかったかどうか、という問題。テキストの残り部分によれば、獣環星座の下にそれぞれ、寺院、植物、樹木、宝石、が列挙されているように思われる。少なくとも遅い時期のシンボルの後で、例えば、12の宝石においてのように、12の獣環星座に対する類似性としての、「ヨハネの黙示録」に見える12の門が伝えられた。だからそこではいつも「12」をもって(12を一つのまとまりとして)勘定されていた(数えられていた)。

例の TE-表(“TE”は、星であることを示すシュメル語の印である。)は(紀元前500年ころのものと考えられる、我々の当面の記録の中にある)次のような暦月恒星群(各月と結びつく星)の列を列挙し、そして、牡羊の真ん中に、太陽運行の始発点があることを当然としている。つまり以下のようにになっている。

(TEは、シュメルの星を表す記号である。ここに記したテキストは、Pinches と Brown の TE-Tafel に関する著作から引用した。)

1. KU.MAL 牡羊、日雇い労働者のように見た。これは、畑地(鯨+牡羊)の東方部分においてある。
2. MUL.MUL と GÛ.AN.NA、プレアデスと牡牛。
3. ŠIB.ZI MAŠ.TAB.GAL.GAL オリオンと巨大な双子。
4. AL.LUL 蟹。
5. UR. 獅子(ライオン)。
6. AB.ŠIN 乙女。
7. Zibanitu 天秤。
8. GIR.TAB 蝸。

9. PA.BIL.SAG 射手(蝸の尾あるいは尻部分と共に siehe Abb.121)

10. SUHUR 山羊(山羊魚)

11. GULA 水を運ぶ人(水瓶)。

12. Ikù と rikis nûnê 鯨、と「魚の帯」

このテキストはそれゆえに、暦月恒星群を真似て、太陽運行経路(黄道)上の12区分を、前もって設定する。それは、我々のオヒツジ座をもって始まる。HAOG 図 129は再現された扁平天球だが、kakkab Ikù つまり鯨のところに説明文にしたがって、春分点に至る直線を描いた(荒木俊馬『西洋占星術』八二頁参照)。そしてそれは、とりわけ(掣のように見える)カシオペアと、獣環上の、南と北の魚を挙げている。

黄道十二星座の成立時期を確定できる粘土板はまだ確認されていないようだ。これまで発見された粘土板の数量は相当多く(たぶん十萬点以上)、そしてまだ研究されていないものがたくさんある。現在のところ、粘土板研究者で天文に強い関心を持つ人はいない。エレミアスは、文字記録と画像記録を精細に考察することによって、紀元前二千年のころ、すでに黄道十二星座が成立していた、と推測した。

紀元前一五〇〇年ころ(中国で十二辰および干支が成立した時期)、バビロニアで黄道十二星座が確立していたという確かな証拠はない。しかしすでもっと多くの星座が成立していた。これらが中国に入ってきてから、中国で十二星座が選択されて、十二辰の成立と結びついたという可能性もある。

## 十二支各字の起原

以下、郭沫若は十二辰各字の起原を、バビロニア天文学と結びつけて考察するが、ここでは特に興味深い「子」の部分を紹介する。他の字についても、手法は同様である。

### 「子」

説文はこう説明している。(図二)

子、十一月、陽気うごき万物しげる。人は五爵の一つとして子を用いる。(成家注:「人」字、宋本は「入」字につくる)象形。すべて子の属はみな子に従う。(李陽冰いわく、子字は、むつきの中にあつて足を合わせているさま。)[子]は古文の子、𠄎に従う。𠄎は髪象形なり。[子]は籀文の子、囟に髪あり。臂脛は机上にあり。

### 郭沫若の説

卜辞は十二辰第六番目の「巳」を「子」字につくる(図四)。ところが十二辰の第一番目は図三のごとくつくる。金文の「辛巳」、「癸巳」、「乙巳」、「丁巳」これらの「巳」もまたみな「子」(図四)につくる。ところが召伯虎簠(六年珮生簠)銘文「四月甲子」

の“子”は図五のようにつくり、傳貞銘文「唯五月既望甲子」の“子”は図三金文 c につくる。

羅振玉はこう述べた。甲骨文の十二辰第一の「子」と、説文に収録されている籀文の字形はすこぶる近い。ただ兩臂および机が無いのみ。召伯虎簠の銘文は臂があるけれども机（几）が無い。卜辞とほぼ同じ。ただ甲骨文の字形（図三甲骨文）は古代金文に見えない。おそらく、簡略にした字形であろう。

郭沫若おもう、傳貞銘文の字形（図三金文 c）は説文の籀文ときわめて似ている。ただ字形の下の部分、傳貞は机が無い。しかし両者ともに兩脛はある。おそらく、脛脛の外は衣服を表しているのだろう。許慎の書はこれが少し誤って伝えられたものと思う。

ようするに、説文籀文[子](図二)と篆文（説文の見出し字）は最初のころは判然とそれぞれ別の字であった。籀文の字形は十二辰の第一字としてのみ用いられる。それ以外の用例は無い。これは卜辞が発見されてから、明らかになった新事実である。また、考えてみる価値のある新たな問題とも言える。なぜ二つの字形があるのであろう。

古代の「子」と「巳」の関係

漢字の初期における「子」と「巳」の関係はかなり複雑である。これに関連する伝承が文献に見える。紀元前六世紀、子産という人物の語る古い伝説が『春秋左伝』に記録されている。

昔、高辛氏に二人の男の子があり、上を閼伯（アツパク）、下を実沈（ジツチン）といて、曠林に住んでいたが、互いに仲がよくなって、毎日のように武器を手にして攻め合っていた。帝堯はこれを心よからず思われ、閼伯を商丘（河南省の地名）に遷して、辰星（大火）を祀らしめました。のち、商族がこの地に住んで栄えたので辰星は商の星となりました。一方、実沈は大夏（太原）に遷して、参星（オリオン）を祀らしめました。のち唐の人がこの地に住み、夏・商の両王朝に仕えてきました。その末代が唐叔虞という方。周の武王の妃・邑姜が大叔をみごもっておられた折、夢に天帝が現われて、「汝が産む子に吾は虞と命名する。唐の地を与え、参星をそれにつけて、子孫を繁育させてやろう」と邑姜に仰せられた。その子が生まれると、その掌紋が「虞」になっている。そこで虞と名づけられたが、やがて成王が唐をほろぼすと、この大叔を唐の地に封ぜられた。（これが晋の開祖に当たる唐叔虞で） こういう事情がありますので参星は晋の星となりました。こうした由来をたどれば、実沈というのは参星の神であります。

この伝説によれば、商の遠祖閼伯は大火（アンタレス）を祀った。そこで大火は商星とも呼ばれる。十二辰第一「子」字の甲骨文の字形（図三甲骨文 b）、これはサソリの象形である（図六参照）。紀元前二千年紀メソポタミアのアッシュルバニパル・テキストによればさそり座 α 星は Nabu 神を表す。Nabu と閼伯は音が近い。また中国の文献では、「子」に当たる歳名は「困敦」であると伝えられている。「困敦」の古代の発

音は、メソポタミアの「星表」に見えるサソリの意味の GIR.TAB と音が近い。

黄道十二宮と獣帯十二星座

郭沫若は、十二支はバビロニアの黄道十二宮に由来すると考えた。郭沫若の考察によれば天上の十二支はバビロニアの獣帯十二星座（この時期は十二宮と同じ）の影響で成立したもので、次のように対応する。

十二支	獣帯十二星座	二十八宿
寅	乙女	角
卯	獅子	軒轅（これは二十八宿以外の星座）
辰	蟹	輿鬼
巳	双子	東井
午	牡牛	畢、昴
未	牡羊	胃、婁
申	魚	奎
酉	水瓶	危、虚、女
戌	山羊	牛
亥	射手	斗
子	蝸	尾、心、房
丑	天秤	氐、亢

羅振玉は、甲骨文金文の「巳」字がどうして「子」字のように書かれるのか、まったく分からない、と言った。しかし郭沫若の考察によれば、天上の十二辰ではバビロニアの「ふたご座」に当たる。この影響で「子」字を使うようになった。

ところで古い文献によれば、商族の遠祖は契という人物である。だから、契と閼伯は同一人物であるに違いない。契はまた偃とも書かれる。説文はこう説明している。（図七）

偃：高辛氏の子であり、堯の時代の司徒であり、殷の先祖である。この字はまた禽の字形に書かれることもある。この字について説文はこう説明している。（図八）

萬：虫の象形である。読みは偃と同じ。

許慎はこの説明の下に古文の字形を収録している。この古文の字形は説文に見える「子」の籀文の字形と実によく似ているではないか。これはきっと「萬」字（金文の字形、図九 ab。説文、図十）の変形の一つに違いない。また説文にはこれと似たもう一つの字形が収録されている。それは「萬」の下部が「虫」に代わっている字形であり（図十一）、許慎は“毒虫なり”と説明している。これはまさにサソリそのものの象形である。金文の中の数を表す千萬の萬は多くこの字形につくる。だから「萬」と、下部が虫の[萬]（図十一）はもとは一字である。とくにその長い足の字形（図九 cd）はすなわち説文の「萬の下部が虫の字形」で、説文はそれぞれ別の字として収録している。以上によって「偃」（禽）の古文の字形と[萬]もまたもとは一字であったと見る

ことができる。

以上によって次のことが分かる。契は商族の遠祖であり、そして閼伯である。中国古代の商星はもとはサソリの星座に由来する。契（偃）のもとの名は、説文に見える古い字形（囟八）や金文「萬」であって、それはすなわちサソリの象形である。そこで子孫はこの字を使うことを避けて、契や偃を使った。こういう字を使ったわけは、商族の後人は、先祖が甲骨に字を契刻（「契」は「きぎむ」の意味がある）していたことを知っていたからである。「子」の籀文の字形もまた偃の古い字形や金文「萬」の変化した字形である。ただ毒虫であるので、使用を避けるようになったのであろう。

閼伯が契であり、至上神・高辛氏の子であるので、サソリの象形を変えて、人形（じんけい）とした。殷人は「子」字を姓とした。甲骨文「子」（十二辰第一字）はサソリの囟である。古代民族の姓はたいいていその民族のトーテムを使用する。殷人は偃を遠祖としたというから、サソリ（籀文「子」、金文の「萬」）をトーテムとしていたことである。

商代には、十二辰第一字は、蝎の象形であった。そして第六字は、子供の「子」を使っていた。バビロニアでは、そこに相当する星座が双子座だったので「子」字を使ったのである。西周時代には、十二辰第一字は巳（つまり「子」）になり、第六字は巳（つまり「巳」）になった。西周時代になって、蝎は中国ではなじみが無いので、十二支第一字の字形の由来が忘れられた。そしてバビロニア起原であることも忘れられた。そして、商族の姓は「子」であったので、十二支第一字を「子」とした。そこで第六字の方は巳に替えた。

古代において西方（イラン、古代インド、メソポタミア、小アジア）の多くの文化が中国に伝わった。

筆者（成家）は以前、殷墟出土の銅製印章はインダス印章を見た商王朝の人がこれを真似て作ったものであると述べた（拙作「伝殷墟出土銅印の真偽問題」）。商王朝の車馬は、西方からシベリア経由で伝来した知識の影響で作られたものであることはすでに証明されている。西方の文化が長江沿いに中国東部に伝わった。インド天文学については「屈原の誕生日」で論証した。三星堆文化（商代とほぼ同時期）では金 gold が愛好された。金箔を多用した遺物は明らかにメソポタミア文化と同一である。黄河文明には見られない。また、権力の象徴である「金杖」も発見された。メソポタミアでは杖が権力の象徴であったが、黄河流域では武器「鉞」が権力の象徴であった。（鉞の象形が「王」字の起原である。）成都平原で出土した大量の「長い象牙」はアジア象のものではない。少し時代は下るが、巴蜀印章はインダス文明やヒッタイト文明の影響を受けたものである。その他、銅鏡、仏教仏像が西方から伝来したことは私が言うまでもない。（拙作「巴蜀印章試論」）また近年は、中国人研究者が、中国に伝来したゾロアスター教文化について遺物をもとに研究を進めている。

私が発表した際に、大橋由紀夫氏が批判的意見を述べられた。しかし具体的に証拠とか論拠を提示して批判したのではなかったので、私はあえて議論を避けた。もし具体的に証拠などを提示して批判したのであれば、当然その批判にこたえなければならぬ。そして私にはその用意がある。

## 資料

『郭沫若全集・考古編』第一巻「甲骨文字研究」「殷契餘論」

「安陽新出土の牛胛骨及其刻辞」 科学出版社一九八二

Alfred Jeremias, *Handbuch Der Altorientalischen Geisteskultur*, 第二版

(総508頁) Verlag von Walter de Gruyter & co. Berlin und Leipzig 1929

Alfred Jeremias, *Handbuch der altorientalischen Geisteskultur*,

erste Auflage (初版、総366頁) J.C.Hinrichs'sche Buchhandlung, Leipzig 1913

新城新蔵『東洋天文学史研究』弘文堂書房 京都一九二八年九月

郭沫若は『甲骨文字研究』『参考書籍』のところでこの書名を挙げ、次のように述べた。この書物と著者（郭）の間に関係が生じた所は、「釈支干」一篇の中である。博士の説と私の見解は多くの点で合わないが、天文学方面の知識をこの書物から実にたくさん得た。

ニュートン別冊『星座物語』教育社 一九九二年十二月

ピーター・ウィットフィールド著、有光秀行訳『天球図の歴史』

ミュージアム図書 一九九七

原著者 A.P. Norton、訳述者 李元等『星図手冊』明文書局 台北 一九九五

伊世同主編『全天星図』地図出版社 北京 一九八四

成家徹郎『キトラ古墳高松塚の星図の系譜』大東文化大学人文科学研究所 二〇〇四

この本は非売品である。ただし図書館や研究所等の機関からの希望があれば寄贈してくれることになっている。電話 03-5399-7325

成家徹郎「伝殷墟出土銅印の真偽問題」、季刊『修美』第九十一号 二〇〇五年七月

成家徹郎「郭沫若の古文字研究」『郭沫若研究会報』第五号

日本郭沫若研究会 九州大学 二〇〇四年九月

